

とうほく本の散歩道3

### 三太郎の日記

#### 「永遠の青春の書」ぜひ

編集者・文芸評論家

小林 直之

仙台市青葉区の東北大学片平キャンパスの近くに、阿部次郎記念館がある。

阿部次郎は山形県上郷村（現在の酒田市）出身の哲学者・思想家で、東北帝国大学美学講座の初代教授を務めた人物。仙台市名誉市民で逝去時には市葬が行われた。しかし、ほぼ同時代を生きた土井晩翠に比べると、その知名度はいまの仙台市民の間でもやや劣るかもしれない。

阿部次郎の著作とえば「三太郎の日記」が有名だ。大正・昭和前期の学生の必読書で、「青春のバイブル」あるいは「永遠の青春の書」とも称される。

私がこの本を知ったのは高校生のころ。国語の授業で先

生が「漱石は『三四郎』を書き、その弟子は『三太郎』を書いた」と話してくれた。家に帰って父に聞くと……

「ああ、有名な天ぷら屋さんの修行日記だろ。昔読んだけど、なかなか面白かったぞ」と。

当時は何のことやらと思っただが、父の冗談の意味が分かったのは、しばらく後になったことだった。

いま手元にあるのは、2008年初版発行の「新版 合本 三太郎の日記」（角川学芸出版）。数年前に購入したものの、恥ずかしながら読了できていない。

とにかく難解で、とても太刀打ちできないのだ。西洋の哲学・文学・宗教等々の言及が頻繁になされ、読みこなすには予備知識を必要とする。実は、この文を書く前にもあらためて挑戦したのだが、見事に返り討ちに遭った。父は全部読んだのだろうか。

この作品が三一歳の若者によって書かれ（1914年「三太郎の日記 第壹」刊行時）、当時の学生たちが読みふけたというのだから、その読書レベルの高さは驚きだ。ただし、全編を貫く内省の思索は、時代を問わず若者の心をつかむ。青春時代を生きる者、あるいは青春時代を忘れない者にしか味わえない、普遍的な魅力が息づいていると言えるだろう。

阿部次郎については、東北大学文学部と記念館が主催する「青春のエッセー 阿部次郎記念賞」もある。こちらは高校生を対象にしたエッセーのコンテストで、現在第9回を募集中。現代の若者の皆さんにも、この賞へのチャレンジをきっかけに、ぜひ「青春のバイブル」に手を伸ばしてもらえればと思う。

（二〇一五年七月一九日、河北新報）

著者および河北新報の許可を得て掲載。